

大きなビジョンを描いた上で ダイナミックな連携強化の取り組みを

委員長 **萩原 敏孝**

小松製作所
相談役・特別顧問



1940年東京都生まれ。67年早稲田大学大学院法学研究科修了。69年小松製作所入社後、88年法務部長、90年取締役、95年常務取締役、97年専務取締役、99年代表取締役副社長、2003年代表取締役会長、2008年相談役・特別顧問に就任。

2001年5月経済同友会入会、2003年度より幹事、2007年度より副代表幹事。2002年度政治委員会副委員長、2003～2004年度政治の将来ビジョンを考える委員会副委員長、2005年度日本の対外援助委員会委員長、2006年度アジア委員会委員長代理、2007～2008年度アジア委員会委員長。

アジアをひとつの市場として 活性化させていく政策が必要

前回のAJBM*以降の、この1年の経済情勢の変化はめまぐるしいものでした。ASEAN側参加者も生易しい状況ではないことを強く認識していて、「危機からいかに抜け出すか」「危機を脱した後、再びアジアが成長センターになるにはどうすればいいのか」との問題意識を共通して持っていました。アジア全体には相当の資本蓄積があり、それをアジア・ファーストで、欧米ではなくアジアを中心に環流させることが大事だという意見が、多く聞かれました。

今回の、100年に一度と言われるような世界的な経済危機にあたって、今こそ、日本がリーダーとなり、アジアをひとつの地域として成長させる目に見える政策を打ち

出すべきです。危機が進行すると、アジアに資金がまわらなくなり、失業者があふれ、長期にわたり経済が混迷する懸念があります。日本に対する期待は、日本がASEANと一体となって、地域経済の活性化に多面的に協力してほしいということです。そのためには、EPA等の各種の経済連携協定を実効あるものとするためにも、日本を含めた各国およびパッケージとしてのASEANが、国内、域内の制度設計や非伝統的安全保障分野について、やるべきことを自律的に、かつスピーディに実行する努力が必要だと考えます。

アジアでのリーダーシップと 国内の構造改革は車の両輪

日本にとって最も大事なことは、5年、10年先の日本がアジアの中で、また世界の中でどういう国に

副委員長 (役職は2008年12月19日現在)

- ・岡部 正彦 (日本通運 取締役会長)
- ・佐藤 龍雄 (昭和電工 取締役専務執行役員)
- ・菅田 史朗 (ウシオ電機 取締役社長)
- ・竹中 哲也 (日本航空 取締役副社長)
- ・玉越 良介 (三菱UFJフィナンシャル・グループ 取締役会長)
- ・松田 章 (丸紅 取締役副社長執行役員)
- ・山口 千秋 (トヨタ自動車 常勤監査役)

委員112名

(インタビューは2008年11月17日に実施)

なるべきかのビジョンを描き、その中で、中・長期的な対アジア戦略を打ち立てることです。ASEANが政治的、経済的に安定した地域にならない限り、わが国の安定的な経済成長も安全保障も担保されないと考えています。小出し、パッチ当ての施策を続けてはダメで、大きなピクチャーの下で相互の連携を強固にしていく取り組みが必要です。

もうひとつ、アジアの活力、特に人的資源を、日本および日本企業に取り込むことが非常に大切です。この点についても、政治や行政が現場の実情を本当に理解しているのか大いに疑問です。われわれ民間人は、政府の政策や将来の国づくりに生の声を反映させるため、より積極的に意見を発信しなければなりません。それが同友会やAJBMの使命だと思っています。

最後に、外に向けたエネルギーは、内需喚起も含めた国内経済の活性化にあることを強調しておきたいと思います。国内における大胆な構造改革と、アジアに向けたリーダーシップの発揮が、整合性あるクルマの両輪として力強く回転することが必要です。

*前回は2007年10月31日～11月2日に開催。

※「第34回 日本・ASEAN経営者会議」(2008年11月2～4日)の報告は21～22ページに掲載。